藥物化學的刺戟ニヨル實驗的迷路炎補遺(承前)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30934

藥物化學的刺戟 = 3 jν 實驗的迷路炎補遺 (承前

九州帝國大學醫學部耳鼻咽喉科學教室(主任久保教授)

高 崎 文

雄

第 六 章 既二記載セラレタル實驗成績トノ比較

テ余ノ實驗成績トヲ比較考察スルハ余ノ用ヰタ 雖各種ノ物質、各種ノ方法ニヨリ幾多ノ實驗ヲ重ネラレ其蒙ル影響ハ詳細ニ亘リテ論ゼラレタリ、 旣ニ第 一章文獻ノ條下ニ 述ベタル 如ク迷路ニ jν 對 化學的物質並ニ余ノ採用シタル實験法ガ未ダ曾テ用ヰラレ スル化學的刺戟 ノ實驗的病理組織學 的研 究ハ 甚シクハ多 今其成績ヲ概括 IJ カラズト įν =

ナキガ放ニ多少ノ興味ナキニアラズト信ズ。

學的刺戟ニノミヨ 織或ハ骨組織ノ新生増殖ヲ認メ殊ニ前庭器ニ對スル所見ハ詳細ヲ缺 キ變化ナク然モ 正圓窓ニ塗布シ或ハ迷路ニ注入スル等ノ方法ヲ試ミ八日乃至百日ノ經過ノ後斷頭固定ヲ行ヒ 今、化學的物質ヨリ 前庭器ニ 、 スレ ノトシテ信憑スルニハ熟考ヲ要スベ オケル所見中、 ۲۲ シェッツョハ「フォルマリン」三鹽化醋酸、 死後變化ト思考セ ラ jν ~ キ クト Æ クロ ノア 雖聽櫛聽斑ニ 1 'n L ŀ 酸、 記載 砒石泥、 セ オケ ラ jν n 神經上皮細胞 迷路ニ於ケル化膿及結締 ガ 沃度丁幾ヲ用ヰテ海 故ニ其實驗的所見ヲ化 認 猽

點下シ或ハ沃度丁幾ニ代フル 的刺戟二 v ッ ∌ IJ - ラ異物ノ器械的刺戟ヲ高潮セ **7***
(3) ハ中耳胞ヲ開キ正圓窓窩ヲ食鹽水ニヲ練リタル「オイクロ ニ砒石泥ヲ以テシ眼震發現後六時間乃至六ヶ月除ニ亘リラ 各種 シ ዹ jν ガ爲二丁字油ヲ以テ之ヲ製シ或ハ充塡ヲ行フ前ニ 沃度丁幾 U 1 jv セメント」ヲ以テ充塡シ或ハ化學 時間的間 隔 ョリテ牛 滴ヲ

jν

Æ

炎性障害ハニー四

H

=

最モ高度ニシテ炎性滲出機轉

ハ急速ニ全迷路ニ瀰蔓ス

jν

コ

ŀ

ヲ注意セ

بَ ٥

體

一固定法ヲ施

シ

ン檢査セ

リ

其所見ヲ概括

スレ

バ

前

庭

Ξ

アリテ

ハ

其

極

初期

グニ於テ

旣

Æ.

圓囊聽班神

經上皮細胞

著

明ナ

短時 相等 隙 見タリ、 量 以 眼震發現後三十分乃至二ヶ月除ニ亘リ各種ノ時期ニ於ラ斷頭或ハ生體固定法ヲ用ヰラ 增 リテハ圓窓ハ テハ純漿液繊維素性炎ョ ラ生ジ ラ刺 ŋ ン井ット 為二 聽 シ 量 ウム」ノ場合 蕳 櫛聽 戟 來 迷路內壓 最高度ナル 動物ニア 液體ヲ以 **≥**⁄ 殊ニ蝸牛殻ニアリテ 1 斑 タ シ所謂迷路水腫 " 神經上皮細胞 jν 正常 Ξ (5) ニテハ迷路淋巴液 其初 'n ハ「ク 亢進ヲ ラ 満っ Æ ラ = ハ迷路 期 ノハ シテ化膿 п 來 w 1 壊死シ然モ リ化膿性炎ニ至 ヲ認 ヲ惹起シ次ニ迷路變性 ラ シ此器械 jν 胞體 ٦ ハ 力 何處 7 ノ徴ヲ見ル **=** jν n jν チウム」、「ク ノ常在成分タ チ氏膜 空洞ヲ形成シ次ニ 的 = 神經纖維ハ チ氏器支柱細胞ハ甚シク胞體内ニ空胞ヲ形成シ螺旋神經節細胞 作用 多ク モ認ムベキ變化ナク二十四時間或ハ其以後 ハ狭ク ⇉ ۸ر jν 所 ∄ ŀ 間 ナクシ 調迷路水腫 IJ 處々死戰變化ニ類ス 1 ĵν U ナリ 種々ナル移行狀態ヲ示セ テ迷路全般 = 1 一移行 カ iv 萎縮ス然シテ此等ノ變化ハ「クロ ・ライ テ既ニ壞疽 jν カリウム」ヲ海猽、 也 チ ・ウム N スネル氏膜ハ陷入ヲ來シ縣石ハ大小不同 3 リ化膿ニ移行 毛 ノ變化ヲ呈 1 鹽 ナ ノ狀態ヲ示ス、 y 又ハ「カ ıν 膨大ヲ呈セリ、 セ 此迷路變性ニ ッ、 家兎、 jν ス リウム」鹽 Æ n 間 其所見ブラウ、 ヲ 叉之ト同 = 猫 動物ニ 起ル 含メ 組織學的檢索ヲナシ 中 約 1 jν ト雖早期 此二次的變性ノ外 急劇ナル 耳腔ニ皷膜ヲ jν = 一方法 ケ 力 ŀ 月半 顯著ナ ルチウム」及「ク ヲ ^ 增 ヲ經 知 n 一固定 ノ にハ葢膜 ラ 加 3 ッ 一變化ヲ 穿刺 過シ 43 不定型ノ y 醋酸 シ jν 1 タ べ グ タ タ シ 淋巴液 泛及鹽 呈 テ淋巴液 力 w ラ 注入 シ ラズ 塊 記 間 æ Æ = 此最 1 ノ等 1 載 jν 二化 酸 = 空 7 7

六日後ニハ外淋巴腔ニ淋巴球、 織形成ヲ見 同樣ノ所見ヲ呈シ陳舊性變化ヲ觀察スルニ使用シタル沃度丁幾注入(三十日)ニアリテハ蝸牛殼基底囘轉ニオケル 侵入シ初メハ漿液繊維素性次ニ之ニ出血性炎ヲ加へ時トシテ化膿性炎ニ移行スルモノアリ。 、ヤ斷定スル能ハズー シテ一般 ナ 至り往 前庭半規管ニ於ラ外淋巴腔ニ漿液性滲出物ヲ容レ神經上皮細胞及支柱細胞ノ膨大、「プラスマ」小球 ル時期ニ於テ生體固定法ヲ行ヒ研索シタリ、 村氏 (6) jν ニ外淋巴腔ニ甚シ、 ۸, 々膿性トナルコトアリ時日ヲ經過スル æ 海猽中耳胞ニ皷膜ヲ穿通シテ「フォルマリン」石炭酸、 自餘 ノ囘轉ニハ滲出物ナク此炎症 般ニ沃度丁幾ハ迷路炎ヲ起シ更ニ結締織新生ヲ來ス傾向ヲ有スルモノナリト記載セ 卽中耳腔ニ注入セラレタル「フォルマリン」ハ容易ニ迷路閉鎖器殊ニ正圓窓ョ 赤血球ノ溢出、 聽斑上皮細胞萎縮ニ傾キ更ニ破壞ニ赴ク、 や周圍ノ骨質ハ新生機能ヲ現ハス、 |三||五%「フォルマリン」|ヲ注入シテ二時間ヲ經過シタル ノ限局性ナリャ或ハ他部ノ漿液性 沃度丁幾ヲ注入シ其後二時間乃至三十日 炎ノ吸收セラレテ 蝸牛殼ノ變化ハ 次デ滲出物 石炭酸注入ニア 残リタ 前庭 ハ繊維素ヲ交フ ノ斥出ヲ見ル、 Æ jν リテモ ノニアリ 間 Æ ナ 略

度ハ正圓窓ニ近キ程顯著ナリ之ヲ要スルニ汎發性非化膿性迷路炎ヲ發起セルモノトス、 氏器ノ支柱 間半、二時間後、 合ニ於テモ之等化學的物質ノ一部ハ明ニ迷路ニ侵入スル リ其變化ハー ラモ外淋巴腔ノ漿液性或ハ漿液纖維素性滲出物ヲ有シ淋巴球ヲ見ル、 富岡氏® 細胞、 中村氏ノ法ニョリ沃度丁幾ノ中耳腔内注入後一時間及二時間、 般ニ外淋巴腔ハ内淋巴腔ヨリモ高度ニシラ殊ニ正圓窓ノ所見ハ最著明ナリ、 ショ羽キ 一〇%「フォルマリン」注入後三十分、一時間、 聽櫛聽斑ニアリテハ神經上皮細胞ガ其中央ニテ主ニ侵害セラレ「プラスマ」小球ノ斥出アリ ノミ、 つ フ ォ ルマリ シ 注入ノ際ハ 其强度前二者ノ中間ニ位スル同様 Æ ノニシテ其進入門戶ハ恐クハ專ラ第二皷膜ナル 二時間後ニ固定シタリ、沃度丁幾ニテハ蝸牛殼コ 神經纖維ハ其極メラ末端部ニ輕度ノ變化ヲ來セ 一%石炭酸注入後二十分、 石炭酸試驗ノ時モ同種 蝸牛殼、 ノ變化ヲ認メタ 前庭共ニ變化 ベ y 時 何レ 間、 何 所見 述べ ノ程 二於 チ 時

著

高崎=欒物化學的刺戟ニヨル實驗的迷路炎補遺

圓窓ョリ 外淋巴腔ハ漿液性又ハ膿性滲出物アリ聽櫛上皮ノ變性ヲ來シ 經繊維亦萎縮ス、 **チ氏器ハ化骨シ前庭外淋巴腔ニラモ結締織乃至骨質ノ増生、** 顆粒ヲ形成ス、 高度ニ ケ月、二ヶ月、 西田氏の亦中村氏ノ法ニ 第二皷膜ヲ通ジテ侵入スルモノナリト云ヘリ。 破壊シ節外蝸牛殼神經纖維、 四ヶ月ノ經過ノ後組織學的研究ヲ試ミタルニ第二週ニアリテハ蝸牛殻ニ於テハ 然モ此變化ハ其範圍擴大セラル、ヲ認メ蝸牛殼ハ 導水管ニハ滲出物ヲ見ル、 ヨリ 海猽 中耳腔二七〇%酒精、 及神經節細胞ハ消失シ神經幹周圍ニモ著明ナル變性アリ前庭年規管ニ於ラハ内 經過長キニ從ヒラ蝸牛殼基底囘轉ハ結締織或ハ骨質ノ新生增殖 ○・五%苛性加里及五○○倍昇汞水ヲ注 前庭神經ハ末梢神經上皮下基質內及骨管内ニラハマ 赤血球ノ溢出、 前庭半規管ヨリモ變化强ク起炎物質ハ 主トシ 神經上皮細胞ノ破壞萎縮消滅ヲ來 基底回轉コルチ氏器 スシニ週、三週、 ヲ呈 ・テ正 jν

内二 反應 ヲ見ルト云ヘリ、 眼震發現後約 Ì = 存在ヲ認メタリ、 述 ヲ使用シ眼震發現前ノ體位變化タル軀幹ノ傾斜出現中ニ固定シ既ニ極メテ輕度ナレドモ 起 之等ノ記載ヲ通覽スルニシェッツ、 皷膜ヲ穿通シテ化學的物質ヲ送レリ、 Ħ w 稍減弱 タル 動物狀態ノ變化ニ基礎ヲオキタルモノナシ其時間ハ富岡氏ガー%石炭酸注入後二十分、 jν チウム ガ 如シ。 シタル 一時間ノ動物ニアリテハ尙解剖學的變化ヲ發現スル 」注入後三十分ニ固定シタルモノ最モ短シ、サレド此時何レモ旣ニ限震ノ發程アリ 然レドモ余ハ「クロロ 蒸餾水及〇八五%食鹽水ヲ注入シタル富岡氏ノ實験ニヨレバ ノミニテ前庭現象ヲ呈セズ、 固定ニ至ルマデノ經過時間ハ皆注入時ヨリ起算シタルモ ヘルツ ホルム」ノ外聽道注入法ノ多數ノ經驗ニヨリ決シテ眼震ヲ *ーグハ中耳腔ヲ開放シ正圓窓ニ化學的物質ヲ塗布シ カ、ル方法ガ果シテ動物實驗ヲ行フ上ニ於テ缺陷ナキ方法ナリヤ否ヤ 然ル **=**. 蒸餾水ニ 能ハズ二十四時間ヲ經タルモノニテハ 於テハ正圓窓及卵圓窓窩ニ ノニシテ余ノ **注入後二時間ニ** 如ク 迷路ノ大部分ニ漿液性 漿液性物質ヲ容レ ウ **ッ ト = 起サ シテ僅 殊ニウサット 刺戟物質 其 他 ٠,٠ ・ークガ 何 jν 著明ナル 稀釋度 ヹ 作 ラ モ 中耳 イ 1 つク 用 夕 病變 ヤー ~ 旣 ク 腔

認メ 見ヲ 象 臨床的所見ヲ病理解剖學的方面 迷路炎ニ關シ 液性炎ナル 其發現スル現象ヲ注視觀察シ眼震ガ 人ハ臨床的ニ テ見ザ 期ノ 、氏ハ其實驗的迷路炎ノ研究ニ方リ 以 固 一示セ 上果シ [定當時ノ 於テ臨床上檢索ノ標準ト Ø 前庭現象ナリトノ解釋ヲ下シ w 處ト n 1 ラ = 3 1 、眼震發現中ナリ 眼震狀態及體位 前庭器ョ 病理解剖學 ミナリ余ノ 郎之ニョ 富岡氏ノ沃度丁幾、 此所見い換言スレ y リテ輕度 **子的見地** ス 如夕限震發現前二於テ確實二迷路二炎症 ル著明ナル現象發現ニハ如何ナル程度ノ炎性機轉ヲ必要ト · •⁄ ス 火狀況ニ ヤ否ヤ w 3 3 加答兒性症狀ヲ現出 眼震ノ發現中ニ生體固定ヲ行 ŋ y が説明セ 石炭酸、 N 将二其最盛期ニ移ラム テ Þ シ 一關スル 起炎物質注入後十一時間 テ臨床的現象 余ガ「ク jν 遽 Æ 4 1 ニ鰤定ス ・「フォ ` 記載ヲ見ズ、 トスル U 當ヲ得タル 17 jν 7: jν _ ノ解説ヲ 7 jν 能 ŀ y セ <u>'</u> ا ンしト ハ ハ今日ニ シ ズ、 注入後數時間ヲ經過 ŀ 3 ぇ 其他ノ外聽道注入試驗ニ於テ眼震發現前 トヲ 試 ス タ 同様二 עו jν 3 余 ヒタリ 3 一於テハ 前後二固定シタリ此時期二於ケル 組織學的ニ立證シタル リ研究ヲ試ミタリ、 ۲, ノ發現セ = ノ質験 過ギズ、 Ի シテ格圓囊ニ既 ト思惟セ 乜 極メテ 18 二於テハ 此處ニ大ナル jν ヲ 食鹽水注入ノ ラ 困難ナル 組織學的 シ ÿ jν 各動物 jν • = ス £ Æ 實ニ迷路疾患殊 出 缺陷 Æ 事項ニ屬ス、 jν 1 1 = = 血ヲ ノナリロ 證明シ得タ ニ於テ 臨床的所見ノ記 ヤヲ知ラズ 場 就キ ۸ر 富岡氏ノ實驗アル 合 伴 存 試驗物質ヲ注入後終始 ス jν 組織學的所見 w 尙 ⇉ 一出現ス 1 ヲ 然 jν w = ト亦同ジ ッォ 記 知 層 レド 前庭器疾患ノ 載 此 坳 1 ~ 毛 微 言ヲナ グ ノミ然 シ 椒 未 前 ナ 日 庭現 載 メテ ダ曾 w 7 吾 漿 チ 所

巴球白 進 症 實驗 吾人 ガ 眼 Þ 稍 震發現前 デニテ 進 ハ前庭半規管ニ ıfır. 球ヲ 漿液性迷路炎ニ於テ初 行 シ 確 タ 外淋巴腔 ニ固定シタル 定ス ıν 詩 = オ 能 於テ始メ = 一認メ ケ ズ jν Æ / 聴櫛 側 極 1 テ メテ臨床上著明ナル前庭現象ヲ認メ得 = メテ輕微ナル漿液性炎症發起ス ラ 眼震 n 神經上皮亦輕度ノ -E ッ 既ニ眼震中固定ョ **1** 發現ヲ見 Ì グ 言ニ jv 一膨大ア 對 Æ シテハ 1 ナ y jν IJ Æ 余ハ 郋 J 更ニ輕度ニ ŀ n 極 少ク 7 ŀ z 貃 æ ラ 必ズ 初期 ŀ ト云ヒテ敢テ支障ナシト jν シテ微量ナル漿液性滲出物及極メテ 少數 Æ シ 化學的 然 ノ漿液性迷路炎ナ -Tć v 眼震ヲ開發ス ۴ 起炎物質ヲ Æ 其進行ガ y w 用 加 信ズ ŧ 何 丰 1 之二 タ ナ = jν jν アラズ 由 余 嵵 程度ナリ リテ是ヲ 動 ア シ 物質 IJ ラ テ ヤ 觀 ラ淋 ٠, 此 稍 余 炎

厭

高崎 = 藥物化學的刺戟ニョ

ル實驗的迷路炎補遺

床上ョ 輕微ナル 成績ヲ以テ直ニ 未ダ迷路性影響ヲ及ボ ス w **=** ŋ 漿液性 、考察スレ 不可 人體 能 炎 バ吾人ガ日常中耳ニ ノ起レ = オケル現象ニ應用セムト サ ŀ jν 10 = 属ス Þ jν 亦知 Æ jν ノナリト ガ ル可ラズ放ニ 故二 對スル藥物的處置ヲ施スニ方リ眼震ノ現出ヲ見ザ 思惟 臨床的處置ヲ行 ス 强劇ナル或ハ組織内竄透性强キ薬物ヲ使用スル ス jν ハ皮相 jν モ ノニ ノ觀 フ アラズト雖人體 = 際シ タルヲ発レ 顧 ノ價値 ズ、 = 就 ナ 或い既 シ キテカ ۴ ス ıν • 限震ヲ發ス jv 能 ıν 現象タ ハ ズ、 放ヲ以テ 際ニハ 此點 jν 病理解剖學的二研究 = 此處置 至ラザ 十分ナル 3 リ シ テ之ヲ臨 注意ヲ 程度 ∄ ーリテ

要スベ

1 ヲ見ル 量ノ出 迷 グハーオイクロ 」及石炭酸注入後ニ於ラ、富岡氏ハ沃度丁幾ノ注入ニ於ラ、西田氏ハ酒精、 路ニオケル 其特異トス 血ヲ來セ 病變パ余 ル記載ナシ、 U jν ール」泥ノ正圓窓塗布ニ際 所見い出血ナリ此出血ハ ノ實驗ニアリテハ 是各化學的物質 眼震終止後二十四時間乃至七日 主トシラ外淋巴腔ニ來リ殆ンド完全ニ此腔ヲ滿ス、 シ出血ヲ見タリト雖如此外淋巴腔ガ赤血球ヲ以テ充塡セ 血管ニ對スル作用、 渗透性 ノ間ハ最モ劇甚ニシ = **苛性加里、** 3 ŋ ・或ハ濃度ニ 昇汞水 ⋾ ノ注入ニ於テ、 テ經過ト jv p 7 村氏ノ「フ ŀ ラ 勿論 共 jν ナ 増激ス ŋ ガ 如キ多 jν 7 ツォ ŋ n

實驗ニオケル特殊ノ所見タルヲ失ハズ。

於テハ 間 B ャ __ 等 部 オ 神經上皮細胞殊ニ = 阳 ヶ シ ニテ西田氏ハ酒精等ノ注入二週日ニシテ富岡氏ハ沃度丁幾ノ一時間、 單二 剶 ラ 確 n 離ヲ 旣 ナラズ 變化高度ニシテ聽斑先ヅ侵サレ 胞體及核ノ變化ヲ呈 水・水・或 破壞ヲ來ス、 ŀ 雖聽斑中、 聽櫛ニアリテ 細胞破壞シテ 之等ノ記載ヲ照合スレバ起炎物質ガ經皷室的通路ヲトリ 正圓囊聴斑ガ 乜 jν ハーケ月ノ經過後ニ於テモ尚破壞現象ヲ呈セズ正圓囊聴斑ニアリ /形態ヲ モ破壊ニ至ラズ中村氏ハ「フォルマリン」ノ五%液ニテハ六日、 テ聽櫛其後ニ害ヲ蒙ル 最初二侵襲 ıĿ メザ jν -E ノ ア セ ラ jν y 或ハ聽石膜ノ • ŧ J ŀ • 余 如 痕跡ヲ 一聽衛 標本ニ於テ明 **一〇%**「フォル 中 ŧ 有 ・ニテ Þ セザ jν ハ 畤 マリン」ニテハ三十分、 其何 認メ得ラ jν 聴備ニ モノア V ガ y テハ 先 jν 三%液ニテハ オ ケ 一障害ヲ 處ナリ、 第三日 ザ jν 3 v F. ŋ ゥ ŧ 此 ニニ於テ 十四 是 ァ 聽班 後 時

抗ノ弱小ナル

그 3

jν

Æ

ノナラム。

原

質ガ他 蝸牛殼 其中央部、 3 神經裝置 ル チ氏器 聽櫛ニアリテハ其頂部 ニアリテハ基底囘轉起始部ニ近キ程其蒙ル變化タル 何レ ∄ y モ早ク之ニ到達スルヲ意味スルモノナリ、 = 最モ早ク現ハル 、ハ諸家ノ所見ト ヤ强度トナルニー 同 神經上皮細胞 一ナリ、 是、 致ス 使サ 此部ノ細胞 w iv ŧ 部位 1 = ガ シテ 刺 聪 戟 全ク刺 班 = 對 = アリ ス 戟物 jν 抵 ラ

週日ョ 中村氏、 u 入後短時間 過ノ後ニ萎縮性變性ノ出現ヲ見ル、之ヲ諸家ノ成績ニ比スルニ多クハ其記載簡單ニシテ詳細ヲ知ルニ由ナシト 骨管内ニアリテモ基質内變化ニ略比例シタル稍高度ノ變化ヲ呈シ神經節内又ハ其以上ニアリテハ 三週乃至一ヶ月ノ經 ヲ 認メ眼震終止第三日ニ至リテ其變化最高度トナリ殊ニ聽班基質ニ於テ甚シ、 神經 13 ホ 繊維 jν y ۷, ハ萎縮シ漸次變性ハ内聽道内繊維ニモ波及スト**、** 富岡氏ニテハ變化極メテ微弱ニシテ西田氏ノ二週日以後ノ所見ニアリテハ骨管内ニマ 」ノ神經纖維ニ對スル親和力ニ、又一部ハ其組織内滲透力ニ因スルモノナルベ ノ狀況記載ヲ缺ケリ、之ヲ綜合スレバ余ノ實驗ニテハ其變化ハ極メヲ早期ニモ ニオケル變化ハ余ノ場合ニテハ眼震發現前既ニ神經終末裝置ノ基質ニ於テ染色不良、 然レドモ氏ノ實驗目的タル他ニアリシヲ以ヲ化學的物質注 其後ニアリテハ多クハ萎縮ノ狀ラ示 現出ス jν n 輕度ノ絞窄ヲ呈ス キ ヲ見ル、是或ハ「ク ー顆粒ヲ發生シニ 雖大約 jν

猛劇ナ 排 頃 t 前庭神經節細胞ニ ラ 障害ヲ與フル 所謂 既ニ輕度ノ變化ヲ示シ ク 12 オケル所見亦之等諸家ノ記載ニ比シテ遙ニ著明ニシテ眼震發現前ニハ變化ヲ見ザ トリー = ŀ 他 بيخ-ノ物質ョ ニノ狀ヲ 細胞間 ŕ y モ甚シキヲ知 乜 出血ヲ來シ之ニ更ニ胞體膨大シ リ此變化ハ經過 ŀ 共 ニ逐次増加 = ス " jν ス ヲ見ル、 ル小體不明ト 即本物質ガ ・ナリ核 神經系統 jν 胞 モ 體 眼 1 震き發 隅 對 シ 腿 テ ス

ラレ y 經皷室的 ァ タ 旣 ıν 處二 ニ正圓窓窩ノ滲出物及赤血球ノ溢出、 ニ化學的物質ガ迷路 シテ其門戶ハ主トシテ正圓窓ナリト云フニ歸 = 一達ス jν = ٠, 正圓窓叉ハ卵圓窓ヲ通過ス 第二皷膜 1 腫脹及鬆疎ヲ 結セ jv Æ ノ 、 見 如 jν シ。 **=** ŀ 卵圓窓ニテハ馬鐙骨關節腔 余 ۸, 上述ノ ノ實驗所見ニ於テハ眼震發現前 如 7 旣 = 諸家 渗出物 ŋ ラ 論議 期 其 セ

高崎=薬物化學的刺戟ニョル實驗的迷路炎補遺

織 繊維素ヲ交へ 日 喰現象尚繼續 球或ハ廢頽、 止後二十四時 E 減少シーケ = 次 圓 實驗二 更二 恣 骨組 ŋ 骨組織ヲ 前庭囊 始マ 破壊セ 間二 月後ニ至リテハ局所 於テハ外聽道ニ「ク セラレ 織 y 新生増殖アリ旧轉ヲ 閉鎖器タル 加へ血管ノ新生アリテ馬鐙骨板ハ之等ノ 赤血球ヲ 猛烈ナル jν ノ卵圓窓附近ニアリテハ極メテ幼若ナル 細胞ヲ攝取スル狀ヲ認メウベシ、 喰ヒ盡サズン 出血性炎ヲ加へ三日ニ至ル、 第二皷膜 u 的二 U ホ 極メテ僅少ナル數ヲ算スル jν 登 ハ新生結締織ニ包埋セラレテ其位置ヲ知ル ム」ヲ ルニ從ヒテ骨組 ٠,۴ 异 注入シタル ザ ルノ慨ヲ示セリ。 此現象ハ經過ト共ニ盛トナリ二週以後ニテハ赤血球 直後ヨリ漿液性迷路炎 織 然ルニ第三日ニアリテハ既ニ白血球 組織中ニ埋沒セラル、 結締織織 結締織、 ニスギズ 維 外聽道腔ニテハ滲出物ハ第七日 繊維素性渗出物 ノ新生ヲ來シ其稠度ハ次第ニ密トナリ 第二週 然モ此少數ナル赤血球 パノ 現出 能 此所見ハ蝸牛殼ニ於テモ ハズ ラ來シ 基底闾轉皷室階腔 漿液性渗出物 Ì 漸次炎症 貪喰現象現 點 ے /Z 增强 至リテ漿液 タル 1 順ヲ 同樣 = モ結 Ù 數 對シ貪 V 眼 赤血 ラ追 公選 震終 シ

-L:

層的 巴腔ニ出現セ 3 幼若ナル結締織ヲ以テ充滿スト雖其上方ニテハ全ク空虚ナリ、 多ク 形 リ推測ス 多量ニ存スル 成ニッ 變化スル キ始メ漿液性炎ノ存在アリシャ v ルヲ バ汎發性漿液性迷路炎ガ炎性刺戟ノ强キ處ヨり結締織ヲ新生シ同時ニ其弱カリシ部ノ漿液性滲出物ガ ŧ ヲ 見ルモ 次第ニ吸收セラレ 明ニ見ルヲウベ 明ニシテ中村氏ハ稀薄沃度丁幾注入三十日後ノ動物ニ於ラ 蝸牛殼基底回轉部ニ結締織樣組 コト極メラ急速ナルハ余ノ實驗後早期ニ於ラモ既ニ炎症性滲出物 シ テ其量減少シ長期例へバ 然ノミナラズ比較的早期 或ハ此處ニノミ限局性ニ炎症發來セ ニアリテハ上方囘轉ノ皷室階 ^ ケ jν 月經過動物ニテハ基底囘轉及第二囘轉起始部 ッ 7 1 グ、 ナー シ Æ ゲル等ノ云フガ ノナリ ヤヲ疑フト 或 前 庭階 如 ハ 雖 迷路各部 ク **漿液性** 余ノ標本所 漿液性渗 送路炎 ノ外 デ 出 淋 吸 物

七 章 非實驗側迷路ノ所見ニ就子

第

收消失シ

タ

jν

Æ

1

ナラム。

刺戟 路炎二 ス 側ヲ健康ナリト ŀ 兩側ニ實驗ヲ試ミ セ n ズ然レド 是ナリ、 迷路炎ニ **力** (5) = 一關ス ノ「一二内耳疾患ノ迷路淋巴液分泌及其成生 方リ非實驗側 3 關スル實驗的 實驗的迷路炎ニ於テモ モ其記載ヲ関スルニ及ビラ吾人ヲシラ疑惧ノ念ノ起ルヲ感 ル實驗的研究」(一九一三)、 カ 看做シテ之ヲ實驗側 jν Þ æ jν ア記載ヲ備 1 Æ = 病理組織學的研究ノ業績ハ細菌學的、 アリ ノ多ク一側ニ行ヒタ ァ ハ非實驗側ニ於ラハ變化ノ認ム 亦非術側 然モ之ニ病的變化ヲ有ス トノ比較對照ニ供シタル 細谷氏。ノ「實驗的迷路炎補遺」(一九一六)、 ニ何等カノ影響ヲ與フル ル實驗少シ然モー側實驗ニ 一關スル ルモ 實驗的研究」(一九一九)是ナリ、余 æ ノア 化學的、 ノ二三ヲ得タリ、 ~3 キ y Æ 屯 ノナ せゃ 1 際シテ非實驗側ニ シ 然 ナキヲ豫想 器械的等ノ各方面 リャ、 4 ルニ jν æ 余ハ迷路炎ニ 卽 細菌學的實驗 1 7 ウ#ッ シ ý 薬物化學的實驗ニテハ タ ŀ v 關 7 即化學的則载 = 二旦リテ其數決 묆 1 ス 3 jν 本研究ニ ク ス jν 所見ノ記 ラ jν ノ論述が果シテ眞 Æ ハ 幾多ノ文獻ヲ ブ 7 際 ラ IJ 逃ヲ 或 ゥ シテ シテ鮮 (29) jv 非實 化學 缺 Æ 迷 涉 ク シ 獵 的 驗 ュ ŀ

耆

高崎=薬物化學的刺戟ニョル實驗的迷路炎補遺

驗 y ッラ 行 p 否 P 毎例 關 兩 シ テ考察 側ヲ 同 様ノ 乜 ム 方法ヲ以ラ處置シ連續切片ヲ製作シ其變化ノ比較檢索ニ ガ 爲 = 此種實驗ヲ試 ミタル た諸家ノ 多ク Ť 彷 Ŀ タ jν †ř 如 キ ハ健康動物ヲ 兩 侧 = 試 驗 ヲ 以テ ナ サ ズ 製シ シ テ タ ıν 對 側 = 質

本

週以後 胞 加 = 眼震發現前 認メ内淋巴腔 見 テハ其壁ニ少數ナリト 三リテ 介實驗側 2解ニ徴スレバ之ヲ以テ輕度ノ漿液性炎症ト看做シテ敢テ過誤ナカル 來シテ第三過ニ ŋ ニハ赤血球像ヲポム 存在スル 攝取 迷路 ニ於テ非術側ニ が所に = ė モ ラ ヲ 三至リ 皃 同 iv 見 時二 ルハ 狀ヲ 雖赤血球ガ滲出物ト共ニ附着セルヲ見、 詳 白 ŋ ıν 然レド 7 細) 阴視シ ý 血球ノ 能 月二至リテハ却ツテ減少ス、 = ラ ッ ハズ其著別ナル時ハ之ニ血管擴張ヲ ハ外淋巴腔 キテハ ŧ 遊出セ ウベ 其存在ハ量的ニ時期ニ 7 既ニ第四章實驗所見ノ ルヲ見、 第二週(第十四號動物)ニ於テハ水平半規管壺腹及楕圓囊ニ稍多量ノ赤血 ニ極メテ少量ノ漿液性滲出物及淋巴球、 蝸牛殼皷室階ノ淋巴球、 加之第三日(第九號動物)ニアリ 3 リテ増減アリ卽眼震終結後第三日 章中 第一 / 伴フ。 述ベタ 週後(第十二號動物)ニテハ之等赤血球ガ貧 べ シ ト 斯 り。 白血球溢出亦其數ヲ著シ 一信ズの 如き所 今其所見ノ主ナル 白 見ハ迷路ニ於ケル炎症像 血球 テハ蝸牛殼基底囘轉皷室階 少數ヲ認メ其全實驗 3 y 點ヲ ク増セリ、 稍細胞成分ノ 撃ツ ノ諸家 N 第三 **資細** 旣 增

略 赤 側 Ń 服 此非實驗側迷路二 相 於テハ第三日 震終止後二十四時間 球 致 溢出ヲ來シ七日ニ於テ貪喰現象現 セ jν ヲ 知ル、 才 IJ 第二 換言スレ ケ 3 w 週三 リ七 **滲出物及細胞成分溢出**/ **ر**ار 至 H 非實驗側 = iv 間 至 一ル間最モ 最 ŧ 顯著 V 漿液性或八漿液性 タリ、 = 旺盛ニシテ第三日ニ於テ旣ニ蝸牛殼ニ貪喰現象ノ出現ヲ來ス、 シ テ淋巴球及各種 消長ヲ實驗側迷路 即非實驗側ニ 出 血性 オ 炎症 白血球遊出增加 ケ ノ炎性現象ノ盛衰ニ比較ス jν 最旺盛期 實驗 侧 ノ所 ハ實験側 シ 見ノ 蝸牛殼或ハ前庭器外淋巴 消 比 長 N 相 = ブ 稍遅レ 實驗 致ス。 侧 タ 非 7 y 實驗 ኑ 腔 IJ テ 雖

フ 然 / ラウ ١,٠ Æ 報告 此 $\mathcal{F}_{\mathbf{i}}$ 例 セ F w 四 處 例 <u>-</u> ∌ 何 V 18 モ 猫 斷頭 中耳腔 国定法 = 各種細菌ヲ注入シ 3 或 麻 一个 I 後 jν 十四例 斷頭固定法ヲ行 中 五例 Ŀ タ 非 jν 術 ŧ 側 = Æ 屬 病變ヲ見 シ 多少ノ死後戀 タリト 云

水管ノ 迷路水腫ナル狀態ヲ惹起セシメタルニ非術側ノ迷路ニ於テモ常ニ術側ニ比シテ稍輕度ナリト雖同様ナル變化ヲ 來セ 變性等ヲ認メ迷路內外淋巴腔ニ種々ノ滲出物及膿ノ存在ヲ見、 化ヲ疑ハシムル所見ナキニアラズ 故ニ之ヲ以テ 全部術側迷路ヨリノ 影響ニヨル ム」及「クロールカリウム」、 ニアリテハ猫、 觀察シタリ。 硬キ結締織新生、 ルチ氏膜ニ脂肪顆粒ノ増加ヲ來セルコトヲ記載セリ。 生體固定法ニョ 出血、 ノ中細菌注入ノ七例ニ於テ非術側ノ内聽道ニ滲出物及圓形細胞ノ 其入口部ノ頽廢物及大ナル白血球アリ此所見ハ基底囘轉前庭階、 家兎、 蝸牛殼導水管ノ廢頹物、 リタルー 海狼中耳腔ニ種々ナル細菌ノ注入、腐蝕劑ノ塗布、 鹽酸、 例ニアリラハ丹毒肉汁ヲ右側中耳腔ニ注入後二十日ニシテ 醋酸ノ迷路内渗透ニヨリテ迷路淋巴液ノ分泌增加ヲ起サシメ之ニヨリテ氏ノ所謂 コルチ氏器官能細胞ノ缺如ヲ見、 ウ ^{井ッ}ト 腐蝕劑ヲ用ヰタルー例ニ於ラ聽櫛、ライスネ マークハー側中耳腔ニ注入シタル ノ浸潤、 電氣燒灼ヲ行ヒ迷路炎ヲ發生セシメタル六 非術側ニハ基底囘轉皷室階及蝸牛殼導 中囘轉皷室階ニモ存 白血球遊出或ハ膿性滲淫、 æ ノナリト 術側蝸牛殼基底囘轉皷室 斷言スルハ ス。 IJ 稍妥當ニア 1 細谷氏ノ實驗 jν コ ルチ カ ル氏膜 jν チウ ラ

ヲ發現セシメウルコトハ實驗的ニ立證セラレタルモノナリ。 ノ得タル文獻ハ極メテ少數ナリト雖細菌又ハ化學的物質ヲ一 侧中耳 腔 注入スレバ 非實驗側迷路 へモ 定ノ病

テ頭葢内合併症ヲ起シ更ニ非術側迷路ニ到達スルモノ、二トナスヲ得ベシ。 ムルモノアリ、之ヲ分チラ「クロロホルム」ノ吸收ニョリ全身中毒ノ一分症トシテ來ルモノ及「ク 外聽道ニ「クロロ ホルム」ヲ注入スルニョリテ起ル 迷路炎ガ非實驗側ニ現ハ jν 徑路 = 關 シ ・テハ 稍 IJ 吾人ノ U ホ w 威興 ム ヲ = 催 3

中 實験ニョリテ明ナル事質ナリ殊ニ其好ミテ障害ヲ蒙ルハ肝、 肝 吸收ニョル變化 腎、 脾臟ニアリテハ之ニ加フル つク П U 朩 ルム」ノ吸入或ハ皮下注射ニョリテ諸種臓器ニ變化ヲ呈セシメウルコ = 出血ヲ以テス、 余ノ外聽道注入實驗ニ於ラモ亦中耳腔ニ入リ 腎、 脾、 心臓ニシテ其脂肪浸潤乃至脂肪變性 タ jν 旣 ーク ヲ來ス就 誻 U

路 心臓ヲ主ト 度 3 :1; = w ノ變化ヲ來シ出血 / テ迷路 現ハル 特別ノ場合ノ外 <u>ہ</u> ガ歐氏管ヲ經テ咽頭ニ流下シ其嚥下或ハ吸收ニョリテ全身的ニ變化ヲ起シ其一 、變化 シ其他内臓 一炎症 ノ出現ヲ見ズ殊 吸收 六何レ ヲ伴フコト 組織學的檢索ヲ行 モ其操作 3 ıν Æ ハ考へ得ザル ノニアラザ = 余 ソ敏活ヲ計ル ノ實驗ニ用ヰタル「ク ヒタリ n ニアラズ依リテ余ハ此關係ヲ究明 べ ガ為三稍多量ノ「エー ŀ 丰 カ | 雖遂ニ何等ノ變化ヲモ認ムル 又一般ニ聽器ノ組織學的標本作製ニ U П ホ jν ム」量ハ僅二○・一竓 テル」或ハ「ク セムガ為ニ各實驗列 能 ハザリキ บ п 一現象ト ノ微量ニ過ギザ 朩 jν 使 故ニ余ノ場合非實驗側迷 ム」麻酔ヲ行 シテ 崩 セラ 非 一就キ jν 術側迷路ニ jν 肝 生體固定法 ガ放ニ之ヲ 腎、 難之ニ æ 脾 輕

Æ ŀ 髓液ヲ介シテ非術側淋巴導水管ヲ經由シテ迷路ニ達シ茲ニ變化ヲ發現セシメタル ト論ズ、ブラウハ炎症ガ非術側迷路へノ移行ノ實験例ヲ記載セリト雖其徑路ニ關シテハ何等ノ説明ヲ與ヘズ、 稱セリ。 此實驗ヲ行 二、頭葢腔通過 -クハ其實驗 ヒテ同 ∌ リー 一ノ結果ヲ得、 細 谷氏 侧迷路 ハー側迷路ノ炎症機轉 二入リタル「カ 酸或ハ遊離丘「イオン」ノ脳脊髓液ヲ經テ他側迷路ニ移行スルヲ證 ルチウム」又ハ「カリウム」、) 頭蓋腔 ニ蔓延シラ腦膜炎ヲ起シ次デ他側迷路ニ波及ス 鹽類ハ淋巴導水管ヲ經テ頭器腔ニスリ腦脊 モノナリト 説キ 更二鹽酸及醋 明スルヲ得タリ N Æ 一酸ニテ ウ ^{井ッ}ト ノナリ

以テ炎症誘發

ノ原因

ŀ

ハ認メ

難

シ

蝸牛 又如何ナル 葢内病變ノ迷路波及ニハ ギ ス ンド、 jν 迷路 殻導水管ヲ通過スル ヲ實驗シタ ノ病變ガ モース、 徑 路ヲト 'nν 種 シュワーバッハ、 以來多數ノ研究アリ、 マナ w 力二 jν アヨ説 | 内聽道ヲ經過スト云ヒ、 道程ヲ以テ頭恭内 就 + キテハ j ラデニ シュルツェ チー ゴ 7 及レ jν こス シ シュ ŀ フリー チ ıν **ワ** ル ライヒ パ ゥ ⇉ ノスガ ギンスキー、 ŀ ッエ ٠, 堃二 人死體ニテ蜘蛛膜下腔ニ注入セラレ シャ ン 西田氏等ハ前庭導水管ヲ經由スル スタイン、 喋々ヲ要セズ、 イベ ゲ jν ケ、 スタインブリュッゲ、 ハーベルマ グラデニゴ、 頭器内ニオ ン、 マイエル、 ハーベルマン、 ケ 土岐、 įν タ 病變ガ迷路ニスリウ 크 ㅏ ル色素ノ蝸牛殻ニ 田中、 ・ヲ證明 本田、 ラ 中村氏等ハ頭 也 jν 植松氏等 y o セン、 w 3 ヤ

原

學的ニ變化ヲ證明シ能ハズト雖眼震消失直後ヨリ第三日ニ至ル間ニ 見 球ノ溢出、 耳 道口附近ニ滲出物及少數ノ白血球アリ眼震終止後第三日ノ動物ハ軟腦膜、 血 動 jν 球ノ遊出可ナリ多ク且赤血球 = 余 ト跳、 物 幾分ソ變化ヲ示セル ラ術 實驗ニ於テハ眼震前期、 側二 漿液性滲出物アリ非實驗ニモ輕度ノ所見ヲ呈セリ然ルニ眼震終止後七日以上ニアリテハ稀ニ腦膜ノ癒着ヲ 赤血球ノ ハ此所見ハ更ニ顯著ニシテ蝸牛殼導水管ニハ多數ノ白血球、 溢出ハ勿論白血球ノ遊走ヲ認メズシテ正常ノ像ヲ示 Æ , アリ、 ノ少數ヲ加へ血管怒張スサレド非實驗側顧顯骨ニハ認メ難シ、 眼震發現中ノ固定動物ニ 即服震終止直後ノ アリ 標本ニアリテハ テ ۸, 脳膜ニ ハ可ナリ著明ナル所見アリ 更ニ七日以上一ケ月 術側顳顬骨附近ノ硬腦膜ニ漿液 何等ノ現象ヲ認ム セリ即一 硬腦膜 赤血球ヲ見ル、 側迷路炎ノ初期ニハ頭葢内 ハ何レモ肥厚シ多數ノ白血球、 jν 非實驗側ニアリテハ 能 眼震終止 ۱ر ズ ŀ 雖實驗列 性渗出 後二十四 物、 組織 赤血 內聽 或 時 白 誾

ラ 變化 炎症ヲ傳フル 聽器ニアリ 考慮ヲ要スル ヲ見ルコト ガ故ニ前庭導水管ニモ漿液性滲出物及白血球ノ散在ヲ見ルト雖内淋巴腔ニ所見ナキ點ヨリシ ŀ 通常變化ヲ來スコ 非實驗側迷路ニ於テハ蝸牛殼導水管ニ白血球、 y 其 テハ之等ノ症狀ハ全ク消退シ稀ニ其殘貽ト ハ蝸牛殼導水管ヲ經由スル 最近木畑氏ガ蜘蛛膜下腔ニ「メチーレ 部ガ非實驗側迷路ニスリタリト ・テモ ヲ報告セ ハ聽器ハ其官能及構造等種々ナル點ニ於ラ視器ニ近似セル器官ナル 力 カ 問 題 jν jν トナクシテ外淋巴腔ニ炎症性所見アリ、 關係アリャ否ャ ニョリテモ明ナリ、 一關シ テ (ハ)既ニ -E ナ ルルカ 幾多ノ論議ヲ經、 點ナリ交感性眼炎ニ於テ起交感眼ノ疾患ガ如何ナ スルモ此微量ガ果シテ炎症ヲ惹起スル 然レド ノ如ク考へラル、 ンブラウ」ヲ注入スレバ其直後既ニ正圓窓ヨリ著色セル迷路 シテ硬軟腦膜ノ癒着ヲ存スルヲ認ムルニ過ギズ。 淋巴球ノ散逸、赤血球ノ溢出及漿液性滲出物ヲ見、 モ實驗ニ用ヰタル微量ノ「ク 然モ 尚未ダ確定ヲ見ルニ至ラザ 頭葢腔ニ入リタル化學的物質ハ比較的迅速ニ迷路ニスル 加之前庭半規管ョリモ蝸牛殻ニ早期ニ且著明 u ニ足ルヤ否ヤ疑ナキ能ハズ。 U が故 ホ jν jv ム」ガ脳脊髓液 眼 ガ w ニ所謂交感性眼炎ア 如 徑路 テ 此非實驗側 シ ŀ = 雖 3 ーリテ 然モ内 に二混ジ 般 液ノ滴下 ニシュミット 被交感眼ニ 迷路 三現 テ稀釋 一淋巴腔 更二 ル以上 ニ來ル 妓. jν ス 乜

波及

ラ

ŀ

ス

健耳

少

ŀ

云

セ

ラ

患

ŋ

ン

ッ

V

jν

ガ

提唱

セ

w

側

眼

, 疾患ニ

3

リテ毛様刺戟ヲ

他側

服

=

及ボ

シ

以テ血行營養ニ障害

ラ來

シ

此處ニ

細菌

沈着

ス

w

= 7

3 ŀ

y

ラ炎症

7

惹起スル

Æ

ノナリ

ŀ

説ヲ認容セ

w

Æ

1

如

シ

聴器ニ

於テ

ŧ

亦

側

3

IJ

他側

三中樞徑

路二

連

側

3

ij

第 八 童 結 論

著 高崎川 藥物化學的刺戟ニョル實驗的迷路炎補遺

原

1

七六

1

厭

つ U П 朩 jν ム ゴョ - 海猽外聽道ニ注ススレ パー定時ノ 後、 著明ナル迷路炎ヲ發現セ シム。

此迷路炎ハ 時 期 = 3 ŋ テ 漿液性、 漿液纖維素性炎症ニシテ更ニ比較的早期ヨリ之ニ 著明 ŕ jv Н 血ヲ 加 フ、 辟 ŀ

テ 化膿性炎ニ移行 ス。

海狼外聽道 ノーク IJ u 卞 iv ム 注入ニ 3 jν 服 震發現前 期ニ 於テ旣ニ 輕度ノ漿液性 迷路 炎ア y 臨床上注 目 スベ 丰 點

ナ ý ` 此時期上限震發現中二 オケ jν E " ŀ ٠٠ 組織學的 ニ顯著ナル差ヲ設ケガタシ。

回 起炎物質ノ迷路 ~ ノ 一經皷室的侵入通路ハ正圓窓及卵圓窓ニシラ前者ハ主路、 後者 ۸ر 副路ヲナス。

厾 前庭半規管ノ神經裝置ノ變化ハ聽衛聽班神經上皮細胞 膨大、 核 ノ變化、 神經織 維 括レ、 表面粗 大瓶 粒 位狀變化

3 IJ 破壞二至 jν 7 デノ各種ノ變化、 前庭神經節 細胞 シーク п 7 ŀ ŋ 1 ゼ」ヨリ萎縮ニ至ル變化ヲ示ス、 然レド Æ 限震

發現前期ニ 神經節細胞ニ變化ヲ見ズ。

大、 前庭半規管ノ病變ハ正圓靈最モ著明ニシテ其聽 班神經上皮細胞ハ 破壞セラル

`

モ

1

7

y ,

半規管ノ變化

い前

庭

比シ遙ニ輕度ニシテ其各個ニハ差異ヲ認メ難シ。

七 蝸牛殻ニ於ケ ル變化ハ前庭半規管ト同様ニシテ只其高度ナル ノミ、 部位的ニハ 基底回轉 皷室階、 最 Æ) 照著 = シ

比較的早期ヨリ結締織及骨組織 ノ新生増殖ヲ來ス第二回轉ョ リハ炎症現象急劇 = 一輕減

コルチ氏器ノ軍層骰子狀變性、

骨螺旋板內耐經纖維

1 括

V

3

IJ

破

壞、

消滅

=

至

テ

各種ノ變化、 更ニ進ミラ ハ骨軸内神經ノ變性、 神經節細胞 ノ萎縮消滅ヲ來ス。

蝸牛殼神經裝置ノ變化ハ基底回轉

ጚ 前庭半規管ト蝸牛殻トノ病變ノ度ヲ比較スルニ前者ハ後者ヨ リモ遙ニ 輕度ナリ。

á 皷膜ハ「クロ ホ jν ムしノ 外聽道注入後、 稍長時 間ヲ經過ス jν デ ハ破壞ヲ來サズ。

化學的物質ノ經皷室的刺戟ニョ jν 迷路炎、初期、起炎物質 ニョ jν 作用ニシテ、 後之ニ所謂誘導性迷路炎ヲ加フル

毛 ノナリ。

LITERATURVERZEICHNIS.

gischen Anatomie des rigen Erkrankgs-Prozesse des inneren Ohres und des Hörnerven. Archiv für Ohreheilkunde. Bd. 99, S. 71, 1916 über die Beziehungen der Liquorsekretion und der Liquorzusasumensetzung zu einigen Erkrankungen des inneren Ohres. klinische Beiträge zur zur Kenntnis der entzündlichen Erkrankgen der Labyrinth-Fentermembranen und ihre Bedeutung für die Genese des Labyimthinfektionen. Zeitschift 咽喉科京都臨床、第十七卷、大正十三年。 Ohrenheilkunde. Festschrift. f. prof. Dr. Urbantschitsch. 1919, S. 675 3) Herzog, Experimentelle Labyrinthites. passow's Beiträge. Bd. 6, S. 344, 1913. Schoetz, Histologische und experimentelle Beiträge zur pathologie der otogenen Labyrinthites. Archiv f.Ohrenheilkunde. Bd. 86, S. 214, 1911, Bd. 95, S. 99, 1914. **Haymaun,** Experimentelle Studien Zur pathologie der akuteutzindlichen Prozesse im Mittelohr (und im Labyrinth). Archiv für Ohrenheilkunde für Ohrenheilkunde. Bd. 64, 1912, S. 155. **峨科京都建床、第十五卷、大正十二年。** 々報、第二十一卷及第二十二卷、大正四及五年。 Mitteilungen der medizinischen Fakulität der Kaiserlichen Universität zu Tokyo. Bd. 16, 1916. 1) Blau "Über den experimentellen Verschluss des runden Fensters. Verhandlungen der deutschen otologischen Gessllschaft. 1905, S. 130. Erkrankungen des Felsentheils u. des Ohrlabyrirths. infolge der acuten eitrigen Mitlelohrentz ndg. Archiv f, O. Bd. 42. 1897. S. 129 Herzog, Labgrintheiterung und Gehör. 1907, S. 89. Verhandlungen der deutschen Otologischen Gesellschaft. 1868, S. 123. inneren Ohres und des Hörnerven. zeitschrift für Ohrenheilkunde Bd. 49, S. 109. 1905 15) Ruttin, Klinik der Serösen und eitrigen Labyrinth-Entzendgen. 1912, S. 30 8) 富岡末吉、化學的刺戟ニ對スル耳迷路ノ生理學的並ニ病理學的反應現象ニ關スル實驗的研究、耳鼻 9) Wittmaack, Über die pathologisch atatomischhen und pathologisch-physioloischen der nichteit-11) Nager, Tuberkulose des Ohres. Zeitse chrift für Ohrenheilkunde. Bd. 53, S. 183, 1907, 7)西田文治、聴神經終末器官ト同神經聽路トノ相對的及其續發的各變化ノ病理實驗、耳鼻咽 13) Politzer, Lehrbnch der Ohrenheilkunde. aufl. V. 1908, S. 386 6) 中村登、迷路ノ炎症ニ就テ及其實驗的研究、大日本耳鼻咽喉科會 4) Hosoga, Beiräge zur experimentnellen. Labyrinthites. 19) Jansen, Über eine häufige Art der Betheilung des 5) Wittmaack, Eeperimentelle Studien 16) Manasse, Zur patholo- Habermann, Über 10) Grünberg, Beitrag **≅** 9

原

著

(77)

ーセスー

Labyrinths nach akuter Mittelohreiterung. Passow's Beiträge. 3. S. 102, 1610. der Ohrenheilkunde. 1900 S. 334 unhe. Bd, 90. S. 1. 1913. Monatssehrift für Ohrenheilkunde Bd. 43. S. 601. 1909 喉科會々報第二十二卷、大正四年。 der akuten Labyrinthites. Archiv für Ohrenheilkunde. Bd 75. S. 1. 1908. 24) Blohmke, Die entzündliche Erkrankungen des Labyrinths. Archiv für Ohrenheilkunde. Bb. 80. S. 1. 1909. Bd. 55. S. 48, 1908 Meyer, Zur Bedeutung des Schneckenfeusters für den Übergung den Eiterung aus dem Mitteloler im Labyrinth. Zeitschrift für Ohrenheilkunde Labyrinthes bei den Mitlelohreiterungen. Archiv für Orehnheikunde Bd. 45. S. 193. 1898. Verlaufes der akuten und chronischen Mittelohrsuppuration Auftretende Labyrinthites. Archiv für Ohrenheilkunde. Bd. 79. S. 153. 1909. Anatomie des Gehörorganes. Zeitschrift für Ohrenheilkunde. Bd. 47. S. 123. 1904. 23)小山景治、猫ノ化膿性中耳炎續發セル漿液性內耳炎ニ就テ、大日本耳鼻咽喉科會々報、第十六卷、明治四十三年。 엉 Polizer, Lehrbuch der Ohrenheilkunde anfl. V 1908. S 621. 28) Meyer, Zur Entstehung der sog. Labgrinthites serosa im Verlaufe akuter Mittelohrentz"ndungen. 29) Blau, Experimentelle Studien über die Labyrinthites. Archiv für Ohrenheilk-26) Uffenorde, Kasuistisehe Beiträge Zum Durchbruchins 27) 中村登、聽器結核二就テ及其實驗的研究、大日本耳鼻咽 21) Schmiegelow, Erfahrungen über die Während des 20) Wittmaack, Beitsäge zur Pathologischen 31) Itard u. Lincke, Enzyklopädie 25) Alexander, Zur Kenntis 22

薬物化學的刺戟ニヨル實驗的迷路炎補遺附圖說明

第一圖 眼震出現前ニオケル水平半規管壺腹、(術側

壺腹部内淋巴腔ニ滲出物アリ。聽櫛神經上皮細胞膨大ヲ見ル、 外淋巴腔二漿液性渗出物及淋巴球白血

ノ遊出アリ。

第二圖 眼震終止後二十四時間ニオケル前半規管壼腹、(術側)

内淋巴腔ノ漿液性滲出物、外淋巴腔ノ稍著明ナル出血及多數ノ淋巴球及各種白血球。

聽櫛神經上皮細胞ノ膨大。

基質血管ノ高度ノ怒張。

溶崩セムトスル「クプラ」。

著

高崎=薬物化學的刺戟ニヨル實驗的迷路炎補遺

第三圖 眼震終止後三日ニ於ケル水平及前半規管壺腹、(術側)

內淋巴腔ニ漿液性及纖維素性廖出物ヲ滿シ白血球赤血球ヲ混ズ。

外淋巴腔ハ極メラ多量ノ出血、白血球、滲出物ヲ以テ充滿ス、血管擴張著明。

聴櫛神經上皮細胞膨大、「クプラ」ノ轉位。

第四圖 眼震終止後三日ニ於ケル前庭神經楕圓囊枝末梢部ノ變化、(術側)

連瓜狀、瓢狀等ノ變化ヨリ斷裂崩壞ニ至ル各種ノ變化ヲ示ス。

第五圖 眼震終止後七日ニ於ケル楕圓囊、(術側)

外淋巴腔ハ多量ノ出血、 白血球、 **滲出物ノ為著シク擴張シ、** 血管亦怒張ス、

部ニハ赤血球ノ貪喰セラ

ル、ヲ見ル。聽斑ニハ著シキ變化ナシ。

外淋巴腔ノ出血減少シ滲出物及白血球稍多量ニ存ス、血管擴張稍著明。

水平半規管聽櫛基質血管擴張シ赤血球基質内ニ滲淫ス。

第七圖 眼震出現中ニオケル蝸牛殼、(術側)

各回轉皷室階及前庭階ハ漿液性溶出物ヲ以テ滿チ壁ニ淋巴球、 白血球附着セ ルヲ見ル。

第八圖 眼震消止後三日ニオケル蝸牛殼、(術側)

各回轉皷室階及前庭階ノ多量ノ滲出物、 基底囘轉皷室階ノ結締織新生、 多數白血球。

基底巴轉コルチ氏器及螺旋脈絡帶ノ破壞。

骨軸内諸處ノ少量ノ出血、及血管怒張。

第九圖 眼震終止後七日ニオケル蝸牛殼、(術側

各回轉皷室階及前庭階ハ赤血球白血球ヲ有スル滲出物ヲ以テ滿ツ、 基底回轉皷室階ハ特ニ白血球多ク其

起始部ニハ結綿織新生アリ。

基底囘轉コルチ氏器及螺旋脈絡帶ハ破壞ス。

第十圖 **眼震終止後三十日ニオケル蝸牛殼、(術側)**

各回轉皷室階及前庭階ノ滲出物ハ蓍シク減少ス、淋巴球、 白血球、

赤血球亦劇減ス。

基底巳轉起始部ノ皷室階ニ骨組織、結綿織及血管ノ新生アリ。

基底囘轉起始部ノコルチ氏器ハ其形態ヲ失ヒラ單層骰子形細胞ニ變化セリ。

蝸牛殼被膜ニモ結締織及骨組織ノ増殖アリ。

眼震出現中ニオケル水平半規管電腹外淋巴腔、(非術側)

外淋巴腔ニ漿液性滲出物及各種白血球及淋巴球ノ散在アリ。

眼震出現中ニオケル楕圓囊聽斑及外淋巴腔、(非術側

聽斑神經上皮細胞ノ膨大。

第十二圖

第十一圖

外淋巴腔ノ多量ノ滲出物及白血球ノ遊出。



